

BABASAKI KENJI TIBETAN THANGKA



日本に帰国して三年以上経った
ころから作風に変化が出てきた
ようだと自覚していた。
代表的なものは、なんといっ
ても金箔を使ってチベットの伝
統的な尊像を描いたものだ。
いままでの作品にはない、あた
らしい表現への挑戦だと思っ
ている。
日本人にとっては金箔というも
のは特別なものではないと思う。
特に仏像仏画にはつきものの画
材だ。
ただチベットでは用いられない。
そもそもチベットには金箔とい
うものが無い。
そのかわりと言うわけでもな

いのだが、チベット・タンカでは金泥の輝きを際立たせる伝統技
法がもちいられる。

右の白多羅菩薩（部分）では腕輪や光輪にこの技法を用い、光輪
の内部の細線には従来の金泥をもちいてある。

その違いは一目瞭然だ。金箔とも異なる独特の表現になる。



白多羅菩薩
opus-123



BABASAKI KENJI TIBETAN THANGKA

馬場崎研二金箔を語る 2014年8月 / About GILT (Gold Foil)



四臂観音 opus-129

それまで試作を続けてきた金箔銀箔を使った作品を 2012 年頃からやっと本格的に制作するようになった。この作品はその第一段階のものといえる。

これらの尊像はチベットの伝統的な儀軌に基づいており、背景にも若干チベット様式を残してはいるものの、全体の基調は日本の伝統絵画、琳派や狩野派が用いた金箔、銀箔を多用したものとなっている。

表現力の点では、やはりちがう。強い弱いとかいうことではなく、素材が違うのだから、表現できることが違うという単純なことなんだ、としか言いようがない。

白多羅菩薩
opus-126

